「近づいて来られる主」

マタイによる福音書９章９－１３節、ヨハネによる福音書１４章５－７節

森島 牧人 牧師

今日は蠟燭が二つ灯りました。クリスマスが近づいて来ています。アドベントはラテン語のアドベントスから来ていて、意味は到来・到着、近づいてくる感じを表しています。この時期、御言葉を読みながら、私たち人間を神の子として受け止めるために、神がその御子を人間としてこの世に送ってくださった出来事を、私たちの喜びとしたいと思います。

今日の御言葉は、「イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、『わたしに従いなさい』と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。」（マタイ９：９）と始まっています。これはマタイという人物が主イエスから弟子としての召命を受けたという記事で、ある人は、このマタイの召命を理解することは、すなわち＜福音・聖書の全体を理解することである＞と言っているように、主イエスの与えてくださる救いの喜びのすべてが、この一つの話を通して＜分かる＞ということなのでしょう。

ここに出て来るマタイという人物は十二弟子の一人で、伝統的な教会の理解としてはこのマタイ福音書の著者です。とすると、マタイは自分が弟子の一人として召された体験を、その時の喜びや感動を交じえず、極めて短い記述で自ら記したことになります。つまり主に従うということは、考え抜いた末になされるというのではないということです。主が通りすがりに収税所に座っているマタイを見て、「わたしに従いなさい」と言われ、マタイが立ち上がってそれに従った、それだけなのです。

さて、当時ユダヤでは、取税人はローマの手先として人々に嫌われ、加えて税金を多めに徴収し、差額を自分の懐に入れることから、赦し難い罪人として蔑まれていました。この時もマタイは同胞から罪ある行為と見なされている徴税の業務を、疑問もなくたんたんとこなしていました。そんなマタイの日常の現場に＜主の方から近づかれ＞、マタイは捉えられたのです。聖書の中の他の弟子たちも同じで、思いもかけずに「わたしに従いなさい」と言われて主に従った人ばかりでした。これは非常に不思議なところですが、これは私たち自身にも当てはまります。私たちにも主イエスが不意に近づいて来られて、バプテスマへと導かれたのです。常識的にはあり得ない展開に、この時マタイも驚いたことだったでしょう。

この時の主イエスの「わたしに従いなさい」というお言葉は、「従って来るなら、わたしはあなたの人生に責任を持つ」ということでしょう。覚悟がなければ言えない言葉です。罪人として侮蔑されて来た自分の人生に、責任を持ってくださるとは・・・マタイはじっと主の顔を目を見ました。そして次の瞬間、彼は立ち上がったのです。その時マタイの中に何が起こったのか、聖書に記述はありませんが、しかし彼は常識外れのことを平然となさるこの方を信じ、自分の人生を賭けてみようと思ったのでした。

それは本当に奇跡のような出来事でした。マタイは弟子として主の昇天の後も宣教や福音書の執筆に励みながら、重い皮膚病の人や中風の人が癒されたことよりも、あの時自分にもたらされた主イエスによる召命こそが、＜奇跡＞だったという、その自身の中にあり続けた強い思いを、この記事にこめ、マタイ福音書８，９章の十の奇跡の真ん中に、挟み込んだのでした。つまり、確かにあの時漁師であった弟子たちには戻る場所があり、戻れる仕事もありましたが、取税人のマタイにとって、この主に従うという決断は、より大きなものだったのでしょう。そしてそれはお金をかき集める生き方から、主の恵みを分かち合う生き方への大転換でした。

マタイが召命に応じた後、主イエスは、マタイの家でマタイの同僚や罪人として扱われていた人々と共に、喜びに溢れた食卓を囲まれました。その時でした。ファリサイ派の人々の「なぜ徴税人や罪人と共に食事をするのか」との声を耳にされた主イエスは「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。・・・わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」と言われたと聖書にあります。（同９：１１－１３）

マタイは、この主イエスの御言葉を自身の宝ものとして、生涯に亘って大切に持ち続けたに違いありません。あの召命の瞬間、主に賭けた自分の決心が大当たりであったことに満足しながら、自分は主イエスの命をもって罪を赦されたとの思いを人々に語り、自分にとっての最大の奇跡であったこの出来事を、しかし短く、心をこめて、聖書の中に書き入れたと思われるのです。　　（説教要約　羽入田悦子）